

# 令和5年度 年報



大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方

# 目次

1	ごあいさつ	1
2	「ぼやくという生き方ーほんま、生きるっちゅうのはしゃあないこっちゃー」 寄稿 鳶野 克己	2
	(運営懇話会会長、日本笑い学会会長、立命館大学文学部特任教授)	
3	上方演芸資料館運営状況 (令和5年度)	7
4	収蔵資料の紹介	
	「秋田實作「家」(一幕二場)について」 荻田 清	17
	(運営懇話会資料整理・活用部会長、梅花女子大学名誉教授)	
	「軽口のレコード三種」 大西 秀紀	22
	(運営懇話会資料整理・活用部会委員、 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員)	
5	展示資料の紹介	27
6	上方演芸資料館 (ワッハ上方) の経緯等	33



## 【表紙の写真】大寄噺の尻馬 初編・二編・三編

江戸時代後期の天保年間に発行された三編三冊からなる噺本。著者は初代桂文治、十返舎一九、立田土瓶等、画は初代長谷川貞信等。落噺・おどけ軍談、その他のさまざまな滑稽噺を集めたものである。

初編の口絵には初代桂文治が描かれている(表紙および左写真上)。文治は東西の桂派の祖で、大阪の坐摩神社に寄席小屋を建て、初めて興行を行った。また、文治は職業落語家として、当時流行していた素人噺と一線を画するためにお囃子や道具を使ったにぎやかな芝居噺を演じて人気を得た。

---

## ごあいさつ

---

大阪府では、上方演芸をはじめとする大阪が誇る文化資源などを活用し、さらなる都市魅力の向上を図りながら、上方演芸の保存と振興に取り組み、親しむ場を提供することで、大阪文化の発展につなげていくことをめざしています。

こうした取組みの拠点として設置された大阪府立上方演芸資料館(ワッハ上方)は、全国で唯一の演芸資料館として平成8年11月の開館以来、大阪府民はもとより国内外を問わず多くの方々にご来館いただき、親しんでいただいております。

当館では、常設展示として、上方演芸に欠かすことのできない大阪弁の解説や、演芸に関する歴史を知ることができる年表、歴史的価値のある公演ポスターをはじめとする貴重な収蔵資料の一部をご覧いただけるほか、在阪放送局から提供いただいた、上方演芸のテレビ映像やラジオ放送などもお楽しみいただいております。

企画展示としては、令和6年10月4日から令和7年3月9日までの予定で、『EXPOと上方演芸展～笑いの博覧会～』と題し、2025年大阪・関西万博を目前に控える中、当館の企画展示場を「上方演芸の博覧会」に見立て、落語や漫才など、上方演芸の各ジャンルで活躍された演芸人や、今話題の演芸人を当館収蔵の貴重な資料とともに紹介しております。

企画展示エリアには高座も設置し、上方演芸各ジャンルのワークショップ等を定期的で開催するなど、ご好評をいただいております。

また、上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民から愛され、親しまれ、後進の目標となる方を選定する「上方演芸の殿堂入り」は、当館の開館以来続けており、令和5年度で第27回を数えております。メディアからも注目をいただいておりますが、令和4年度の段階で受賞者が100名に到達し、本年8月には新たに2組4名の方々の殿堂入り表彰式を執り行うことができました。

今後とも、こうした取組みを通じ、大阪の伝統と誇りである上方演芸を広く発信し、上方演芸の保存と振興に着実に努めてまいります。

関係者の皆様、この年報をお読みの皆様におかれては、より一層のご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

それでは、ページを進めていただき、当館における取組みや、上方演芸に関する資料研究の一端をご覧ください。

令和6年12月

館長 本田 吾郎

---

# ぼやくという生き方

## ーほんま、生きるっちゅうのはしゃあないこっちゃー

---

鳶野克己

(運営懇話会会長)

(日本笑い学会会長・立命館大学文学部特任教授)

### 1. 都家文雄と「ぼやき漫才」の誕生

上方演芸において、長年親しまれてきた馴染み深い漫才芸の一つに「ぼやき漫才」というジャンルがある。「ぼやき漫才」の「ぼやき」とは、「ぼやく」という動詞からきているのだが、大阪船場の商家に生まれ、郷土史家、方言研究者として大きな足跡を残した牧村史陽の編んだ詳細緻密な『大阪ことば事典』に、大阪ことばとしての「ぼやく」という語が挙げられている。そこでは、「ぼやく」とは、「つぶやく。ぶつぶつと不平をいう。また、小言をいう」とあり、その前項で、「ぼやき」は、「よくぶつぶつと不平ばかりいつている人」と説明される。そして、それに続けて「漫才の都家文雄がボヤキ漫才といわれ、舞台へ出るとすぐ、客の悪口に世相の不平、物の高くなったことから若い女の服装に至るまで、揚げ足とりやら皮肉やら、さんざんぼやいて客を笑わせていたが、この種の漫才をボヤキ漫才、略してボヤキと呼んでいる」と記されている。

また、京ことば・御所ことばを中心とした語源や言語文化研究の碩学堀井令以知の編んだ『上方ことば語源辞典』にも、「ぼやく」は、「小言をいう。不平をこぼす」の意で、「つぶやく」から変化したこと、「ぼやき」は、よくぼやくことやよくぼやく人を指し、「世間や人の行動への不平をぶつぶついい客を笑わせる漫才」を「ぼやき漫才」と呼ぶことなど、「ぼやく」、「ぼやき」、「ぼやき漫才」の語義が、簡にして要を得た形で提示されている。堀井もまた、「ぼやき漫才」の創始者として、やはり都家文雄の名前を挙げる。そして、文雄の出現以来、「ぼやき漫才」は上方漫才の特徴話芸となったと述べている。

さらに、上方演芸界の敏腕な裏方としても活躍した多芸多才な漫談家で、上方演芸資料館が顕彰する第2回(平成9年度)「上方演芸の殿堂入り」に選ばれた花月亭九里丸の編んだ『寄席楽屋事典』にも、「ぼやき漫才」という項目が見出される。この事典にも、「ぼやき漫才」とは「辛辣なる風刺と毒舌を以て、巧みに世相を喝破するもので、都家文雄を創始者とする」との記述がある。そして、「その後に数多くの漫才や漫談で、これを真似して上演する人が現れたが、その話のなかに混ぜての笑いと落ちが必要である。ただ毒舌の言い放しでは芸としてはなっていない。それは文雄の如き年期を入れて来た人こそ、始めて出来得る芸である」といった文雄に対する評価がなされている。

上方の伝統芸能や文化をめぐる豊穡な議論の場を提供し続けた類い稀な雑誌『上方芸能』を創刊し、自身も優れた演者であり研究者である木津川計の『上方の笑いー漫才と落語ー』でも、「ぼやき漫才」の創始者として文雄が紹介されている。文雄は大正期に落語家として出発したのだが、やがて漫才師に転じ、「文化漫才」と銘打って自作自演した。木津川によれば、文雄の漫才は「毒舌と批評精神に満ちて」おり、「一貫して社会的弱者のあえぎや苦悩を察し、たえず圧迫される側に加担して代弁した」ものであったという。加えて木津川は、晩年の文雄における「ぼや

き」の対象は多岐にわたり、当時のアポロ 11 号の月面着陸をも「ぼやき」のネタにしていたことを覚えていると述懐し、科学の横暴を嘆くような文明評にまで及んだとも記している。

都家文雄の登場によって、憎まれ口ともとれる頑固で辛辣な社会的批評性を纏いつつ、しかもしっかりと観客の笑いを取る「ぼやき漫才」というジャンルが上方演芸に切り開かれたといえる。関西演芸協会の会長も務め、人望も厚かったといわれる文雄は、上方漫才における独自の秀逸さを帯びた特徴話芸とも評しうる「ぼやき漫才」の祖として、相方の静代を伴って、第 8 回（平成 15 年度）「上方演芸の殿堂入り」を果たし、その事績が広く顕彰されることとなった。

## 2. 人生幸朗という「ぼやき」

都家文雄によって創出され、新たな漫才芸として受け入れられた「ぼやき漫才」の後継者として、昭和 30 年代から 50 年代までの長きにわたり人々に広く支持され愛されて、第 11 回（平成 18 年度）「上方演芸の殿堂入り」に至ったのが、人生幸朗・生恵幸子のコンビである。「まあ皆さん聞いて下さい」と口火を切り、身近な世相や風俗を槍玉に、幸朗が次々とぼやき続けた後、「責任者出てこい」と声を張り上げる。それを受けて、幸子が「ほんまに出てきはったらどないすんのん」と詰め寄ると、「謝ったらしまいやないか」と切り返すあのやりとりを懐かしく思い浮かべる昭和の漫才ファンは少なくないことだろう。

幸朗は文雄の門下であったが、前出の木津川によれば、文雄に比べると、「ボヤキの対象が権力者でなく、街の小悪党に定められたから、批判精神は一步後退」したとされる。しかし一方で木津川はまた、幸朗は「量産される流行歌に狙いを定め、徹底的にその歌詞の不合理を衝いて笑わせ」ながら、「その合い間に、庶民の哀歎をにじませる」という型に「ぼやき漫才」の活路を見出したのだという。木津川は、幸朗の「ぼやき」は文雄ほど攻撃対象を高めなかったが、流行歌の歌詞を叩くその口ぶりから滲み出てくる庶民の切ない生活感情は、幸朗が長い貧乏暮らしを通じて得た「貴重な笑いのための財産であった」と論じている。

上方演芸全般への造詣が極めて深く、幅広い評論活動で知られる戸田学も、その著『上方漫才黄金時代』で、都家文雄と人生幸朗の「ぼやき漫才」それぞれの特徴について、実際のネタをたどりながら、二人への敬愛の思いに溢れた筆致で紹介している。

戸田によると、文雄の「ぼやき」は、「政治、野球選手の私生活から映画女優の噂話、さらには母の慈愛から小さな親切へと各方面に話題が及ぶという庶民の心情に訴えた、漫才のワイドショー的な中身」であり、観客にはよく受けたのである。さらに戸田は、カンカンになって怒る文雄の横で、相方で妻でもある静代が文雄を持ち上げ、間髪入れずに「そうでんな」、「ええこと言いませ」などと短い言葉をかぶせていく、「柔らかい、ある意味、精のない受け答えの間」の絶妙さにも言及している。

他方、幸朗の「ぼやき」は、身近な世相の理不尽や不合理に向けられながらも、十八番は、上述のように流行歌の歌詞をネタにする「歌ぼやき」であった。しかし戸田は、「歌ぼやき」をはじめとするこうした「ぼやき」の中身を賞賛しつつ、幸朗におけるぼやき芸の大きな魅力をその「可愛さ」に見るといふ。すなわち、戸田は、師匠の文雄ゆずりの強く迫力ある口調で幸朗がぼやいた後、やはり相方で妻でもある幸子から、「何えらそうここというてんねん、このドロガメ」、「鼻くそ」、「よだれくり」とツッコミを入れられ、「おかあちゃん、かんにん」、「ごめんちゃい」と、そ



の謹厳で剛直な容姿に不釣り合いな、可愛いくちよけた仕草を交えて謝するというあの馴染みのパターンのことを指摘するのである。ここでは、一見筋の通った気骨溢れる「ぼやき」の主張は、いつもそばにいて裏も表も知り尽くした相方からの、手厳しくも情愛に満ちたツッコミに触れて、急に拍子が抜けて威勢が萎え、はにかみながらちよけるような口調の謝罪へと変わる。その臆面もない豹変ぶりが観客に「可愛い」と映り、笑いを誘うのである。

人生幸朗は年齢においてもキャリアにおいても上方演芸界の大長老であり、重鎮中の重鎮であった。幸朗の、相応の経験と見識に基づくかのような、世相や流行歌の歌詞の理不尽や不合理を衝き、肩を怒らせ口角泡を飛ばしてぼやく雰囲気と、「ごめんちゃい」という、年齢とキャリアにそぐわぬその愛らしい仕草とのギャップに面して、観客は思わず吹き出すのである。激しくたたみかける「ぼやき」の主張に、観客は「いわれてみたらほんまにその通りや」と拍手喝采する。そして「責任者出てこい」と叫ぶ幸朗が、その主張をとことん貫徹するかと思いきや、「ほんまに責任者が出てきはったらどないすんのん」と問われて、「謝ったらしまいやないか」とのたまうのである。考えてみれば、それこそ、こんなええ加減で無責任なことはない。

「てなもんや三度笠」や「花王名人劇場」をはじめ数々のコメディや演芸の番組を手がけた名物プロデューサー澤田隆治も著書『上方芸能列伝』で、対象をさんざんあげつらいながら、最後に「可愛く」謝って自身の発言に責任を取らないというこの馴染みのパターンが、「ぼやき」の本質をはっきりみせてくれる」と指摘している。青筋立てて、血管が切れんばかりに憤り、これでもかとぼやいた後、「可愛い」謝りの仕草によって責任から逃走するという幸朗のええ加減で無責任な姿は、常識的には決して褒められたものではない。にもかかわらず、そのええ加減さと無責任さが許容されるような「ぼやき」の本質とはどのようなものか。こうしたええ加減さと無責任さを抱え込んだ「ぼやき」を、私たちはなぜ笑うのだろうか。私たちは、幸朗的な「ぼやき」に、私たちの生活や生き方の根底にかかわる何を見出し、何を感じ取っているのだろうか。

### 3. 何をぼやくのか、何でぼやくのか —「生きることは、ぼやくこと」—

既に見たように、「ぼやく」とは、辞書的には、「つぶやく。ぶつぶつと不平をいう。また、小言をいう」の意である。人生幸朗の「ぼやき漫才」における「ぼやき」は、流行歌の歌詞をあげつらいつつ、日々の生活で遭遇する「世間」や「世相」の理不尽や不合理に対して発せられる「不平」や「小言」なのではあるが、それは原理的に見て、「世間」や「世相」の理不尽や不合理を実際には是正したり、改善したりするものではないのだと思われる。本気でそうしようとするなら、ぼやいてなどいず、実際に社会的政治的な実践活動に取り組むにしくはない。「ぼやいている暇があったら、現実的には是正や改善の活動に取り組み」というわけである。

幸朗における「ぼやき漫才」の「不平」や「小言」は、敢えていえば、その「不平」や「小言」の対象の「是正」や「改善」を目指さず求めない。いやむしろ、幸朗の「ぼやき」は、私たちが日々生きている実感のどこか深いところで、「是正」や「改善」を「求めてもじゃあない」と見極めていることを表しているのではないか。しかし、それは、私たちを憤らせ、嘆かせる「世間」や「世相」の具体的な理不尽や不合理に面して、私たちがそれらに唯々諾々と服従したり屈服したりすることを意味するのではない。幸朗的な「ぼやき」は恐らく、朝起きて顔を洗ってぼやき、食事をしてぼやき、用を足してぼやき、街ゆく人の服装や振る舞いを見てぼやき、流れてくる流

行歌を耳にしてぼやき、仕事場でぼやき、帰り道でぼやき、帰宅してぼやき、寝床に入ってぼやき、寝言でもぼやく。昨日も今日も明日もぼやき続けるのである。

「ぼやき」は、身の回りにある理不尽や不合理の「是正」や「改善」を訴え要求する社会的政治的な活動ではない。さらにいえば、いわゆる道徳的な行為ですらないのだろう。「責任者出てこい」と息巻いて、実際に出てきたら「謝ったらしまいやないか」という幸朗が、実は本気で悪かったと謝ろうとはしていないことを私たちは感じ取っているのではないか。この「謝ったらしまいやないか」という言い回しについて、日本における笑い学研究の先駆者であり、「笑いに関する総合的・多角的研究を行い、笑いの文化的発展に寄与すること」を目的として「日本笑い学会」(<https://www.nwggk.jp>)を立ち上げ、上方演芸資料館第2代館長も務めた井上宏も、その著書『大阪の文化と笑い』のなかで、「意外な落とし方ですが、この言い回しのなかに、腹の底ではそう思っていないのであって、折あれば何回でも言うたろぞという口吻を読み取っていて、そこを笑ってしまうのだと思います」と述べている。

私たちがまた幸朗と同じように、日々生きるなかで、我慢ならないことや憤懣を覚えることにしょっちゅう出くわす。したいことはできず、したくないことはせねばならない。見たくもないものを見せられ、聞きたくもないことを聞かされる。思いは届かず、願いは叶わない。総じて、なんでやねん、どないなってんねんというような難儀で厄介なことに満ちている。しかし、静かに思いをめぐらせば、それらは実は、生きていく限りどうにも儘ならない如何ともしがたい難儀さと厄介さなのではないか。努力によって獲得できるものと工夫によって回避できるものだけで、人生は成り立ってはいない。

この難儀さと厄介さは、人生を通じて決して避けられはしないものであり、それと付き合っていくことが私たちの生きる現実である限り、私たちはぼやくしかないといわねばならない。この「ぼやき」は終わらない。「ぼやき」は何回でも責任者を呼び立てるし、何回でも謝り、何回でもぼやくのである。私たちは、懲りもせずぼやき続けることによって、人生における儘ならない如何ともしがたい難儀さと厄介さを、その儘ならなさや如何ともしがたさのまま受け入れ、味わい、さらには楽しむことさえできるのではないか。「謝ったらしまいやないか」への笑いは、そうした「楽しみ」へと昇華する「ぼやき」への共感の笑いなのだろう。

「ぼやき」の根底には、私たちが人間としてこの世に生きていることそれ自体の儘ならなさや如何ともしがたさを思い知らされつつ、「にもかかわらず人生を楽しむこと」への感受性が横たわっている。そこでは、「ぼやき」は、生活における個々の出来事についての「不平」や「小言」であることを超えて、この難儀で厄介な人生を生き抜くための原理的な根本態度とでもいうべきものだと思われてならない。

以上、何人かの先達の業績を手がかりに、「ぼやき漫才」の創始者都家文雄の「ぼやき」を振り返り、後継者人生幸朗における「ぼやき」の特徴について、文雄のそれと比較しつつ描出した後、幸朗的な「ぼやきの本質」についての私見を簡単に披瀝した。幸朗的な「ぼやき」を「生きることの根本的な儘ならなさや如何ともしがたさ」をめぐる深い感受性に裏づけられているとするのは、かなり偏った見立てと思われるかもしれない。しかし、上にも触れたように、繰り返し立ち現れる難儀で厄介な出来事、さらには、そんな風に難儀で厄介な出来事だらけの毎日に面して、「ぶつぶついう」ても仕方がないと知りつつ、それでもやはり「ぶつぶついう」てしまうとい

う、人間ならではの生きることの現実を具に見つめるとき、「ぼやき」は、凡庸で底の知れた、取るに足らない「不平」や「小言」の寄せ集めでは決してなく、そうした現実から滲み出てくる一筋縄ではいかない複雑な情感に豊かに根ざすと捉えることは可能であるとする。

「ぼやき」に与する側にたつてやや偉そうにいえば、「ぼやき」を後ろ向きで否定的消極的な、敗者の人生観だとして一蹴する人は、「努力や工夫が大事やないとはいわんけど、人生にはなんぼ頑張ってもどないもならんこと、儘ならんことがある」と感受することを通じて湧き上がってくる「人生を深く生き抜く力」の存在にまだ気づかずにいるだけなのである。「ぼやき」の究極的対象、すなわち、人生で一番どないもならん儘ならんことは、「どういう訳か生まれてきたこと」と「いやでも死んでいくこと」であるが、これについてぼやくのは次の機会に譲ることをお許し願いたい。

一生ぼやきまくって、棺桶に入るその時も、「生きることは難儀で厄介やったけどしゃあないなあ、けどやっぱり、なんでやねん」とぼやくことを夢見る。そして、「責任者出てこい」と啖呵をきって、誰か知らん責任者が出てきたら、「ごめんちゃい」と「謝ったらしまいやないか」である。

それにしても、「あの世」にも「ぼやき」はいてるんやろか？

#### 【参考文献】

- 井上宏 『大阪の文化と笑い』 関西大学出版部 2003年  
花月亭九里丸（編） 『寄席楽屋事典』 東方出版 2003年  
木津川計 『上方の笑い 一漫才と落語一』 講談社 1984年  
澤田隆治 『上方芸能列伝』 文藝春秋 1993年  
戸田学 『上方漫才黄金時代』 岩波書店 2016年  
堀井令以知（編） 『上方ことば語源辞典』 東京堂出版 1999年  
牧村史陽（編） 『大阪ことば事典』 講談社 1984年



## 上方演芸資料館運営状況（令和5年度）

### ■ 上方演芸資料館（ワッハ上方）入館者数・視聴ブースリクエスト件数〔月別推移〕

月	入館者数	開館日数	1日あたりの平均人数	視聴ブースリクエスト件数 (月計)
4月	1,855人	26日	71	244件
5月	2,297人	26日	88	258件
6月	2,043人	26日	79	255件
7月	2,471人	26日	95	316件
8月 ※1	2,886人	26日	111	270件
9月	2,321人	26日	89	230件
10月	1,940人	26日	75	228件
11月	2,269人	26日	87	225件
12月	1,924人	24日	80	248件
1月	1,702人	24日	71	203件
2月	2,155人	25日	86	223件
3月	2,998人	27日	111	255件
合計	26,861人	308日	87	2,955件

※1 令和5年8月15日13時から臨時休館（台風の影響）

〔休館日〕毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は、翌平日が休館日）及び年末年始

### 〔過去3か年（令和2年度～令和4年度）〕

年度	入館者数	開館日数	1日あたりの平均人数	視聴ブースリクエスト件数 (月計)
R2 ※1	12,166人	266日	46人	2,509件
R3 ※2	13,212人	258日	51人	2,182件
R4 ※3	23,723人	308日	77人	3,100件

※1 令和2年4月1日から5月18日臨時休館（新型コロナウイルス感染拡大防止）

※2 令和3年4月25日から6月20日臨時休館（新型コロナウイルス感染拡大防止）  
令和3年11月30日臨時休館（館内点検）

※3 令和4年9月19日13時から臨時休館（台風の影響）

■ 上方演芸資料館運営懇話会 開催実績

2 回開催 (令和 5 年 6 月 9 日、令和 6 年 2 月 22 日)

■ 上方演芸資料館運営懇話会 各部会 開催実績

・ 殿堂入り部会

2 回開催 (令和 6 年 1 月 16 日、令和 6 年 2 月 15 日)

・ 資料整理・活用部会

10 回開催 (月 1 回開催)

※8 月及び 1 月は台風等により中止

・ 企画部会

2 回開催 (令和 5 年 6 月 30 日、令和 5 年 12 月 20 日)

・ 放送資料部会

1 回開催 (令和 5 年 11 月 14 日 書面による開催)

■ 研修会実施報告

資料整理・活用部会(資料整理に係る有識者会議)委員が、資料整理等に関するテーマの研修を実施(資料館職員が受講)

<実績>

開催日	部会等	研修内容	講師
4 月 11 日	第 1 回	伝統芸能と大衆芸能	荻田部会長
6 月 13 日	第 3 回	砂川捨丸のレコード	大西委員
7 月 11 日	第 4 回	「にわか」から新喜劇へ①-祭りの中の「にわか」-	荻田部会長
9 月 12 日	第 6 回	「にわか」から新喜劇へ②-俄師の出現と座敷俄-	荻田部会長
10 月 17 日	第 7 回	「にわか」から新喜劇へ③-「浪花〇〇カまち請角力」-	荻田部会長
11 月 14 日	第 8 回	「にわか」から新喜劇へ④-近代に入ってからの俄-	荻田部会長
12 月 12 日	第 9 回	レコード再生・録音に必要な機材	大西委員
2 月 20 日	第 11 回	芝居台本(寄贈資料)	荻田部会長
3 月 12 日	第 12 回	1970 年代の上方落語界	荻田部会長

※第 2 回、第 5 回及び第 10 回は開催なし


■常設展示 開催実績

場 所	内 容	展 示 風 景
<p>常設展示エリア</p>	<p>【テーマ・ねらい等】            大阪弁の解説パネルや、歴史的価値のあるポスター展示のほか、映像音声視聴ブースを設置。上方演芸の歴史を知ることができるコーナー。</p> <p>令和5年度は「ま行」の展示替えを実施</p>	   

■企画展示 開催実績



場 所	内 容	展 示 風 景
<p>企画展示エリア</p>	<p>【テーマ・ねらい等】            上半期「『上方演芸の殿堂入り』            名人特別展」(人生幸朗・生恵幸子)</p> <p>期間            令和5年3月21日～9月24日</p> <p>「上方演芸の殿堂入り」を果たした演芸人の足跡をたどり、上方演芸の魅力や歴史を紹介する特別展示。</p> <p>令和5年度上半期は、漫才コンビ『人生幸朗・生恵幸子』(第11回(平成18年度)「上方演芸の殿堂入り」)にスポットをあて、衣装や愛用品などの収蔵資料を展示し、お二人の功績を紹介。</p>	   

■企画展示 開催実績

場 所	内 容	展 示 風 景
<p>企画展示エリア</p>	<p>【テーマ・ねらい等】            下半期「What is 上方演芸？            展」</p> <p>期間            令和5年10月6日～令和6年3月3            日</p> <p>収蔵資料を活用し、上方演芸            に親しんでいただける企画展            を定期的で開催。</p> <p>令和5年度下半期は、あらた            めて「上方演芸とは何か」につ            いて、ジャンル（落語、漫才、            講談、浪曲、諸芸）ごとの歴史            や活躍された演芸人とあわせ            て紹介。</p>	 <p>The 'Exhibition Scene' column contains four photographs showing the interior of a museum gallery. The photos depict various display cases, including glass-fronted cabinets and open shelving units, arranged on a light-colored wooden floor. Exhibits include framed documents, small artifacts, and a large blue fabric piece. Informational signs and posters are visible on the dark grey walls. The lighting is bright and even, highlighting the exhibits.</p>



## ■上方演芸の殿堂入り特別展示 開催実績

場 所	内 容	展 示 風 景
<p><b>体験エリア</b></p>	<p><b>【内容】</b>            第 26 回上方演芸の殿堂入り演芸人の展示</p> <p><b>期間</b>            令和 5 年 10 月 1 日～令和 6 年 9 月 30 日</p> <p>上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる演芸人を、「上方演芸の殿堂入り」として毎年表彰。</p> <p>第 26 回上方演芸の殿堂入りをされた、桂吉朝さん、今いくよ・くるよさんを収蔵資料とともに紹介。</p>	 

## ■ 館内イベント開催実績 ※主催事業等

- ・ 体験型講習会（ワークショップ）及び専門家講演会

開催回数 40 回、参加者数 621 人

（開催期間：令和 5 年 4 月～令和 6 年 3 月）

- ・ 在阪放送局とのコラボイベント

「爆笑！天国寄席～今蘇る懐かしの夫婦漫才～」

開催回数 1 回、参加者数 23 人

（開催日：令和 5 年 7 月 22 日）

- ・ 大学と連携したイベント

開催回数 3 回、参加者数 61 人

（開催期間：令和 5 年 6 月～令和 5 年 11 月）



<体験型講習会（ワークショップ）及び専門家講演会>

回数	開催日	内容	講師	参加人数
1 2	4月15日	落語の魅力、楽しみ方	笑福亭笑利	27人
3 4	5月6日	腹話術（諸芸）体験	川上じゅん	37人
5 6	5月20日	浪曲の魅力、楽しみ方	菊地まどか	37人
7 8	6月3日	講談の魅力、楽しみ方	旭堂南照	30人
9 10	7月1日	講談の魅力、楽しみ方	旭堂南扇・旭堂南歩	27人
11 12	8月5日	ジャグリング（諸芸）体験	もりやすバンバンビガロ	44人
13	8月12日	「1970年代 万博期の演芸界」	大池晶	25人
14 15	9月16日	浪曲の魅力、楽しみ方	京山幸太	27人
16 17	10月7日	落語の魅力、楽しみ方	月亭天使	18人
18 19	10月21日	講談の魅力、楽しみ方	旭堂南華	21人
20 21	11月4日	紙切り（諸芸）体験	林家笑丸	28人
22 23	11月18日	浪曲の魅力、楽しみ方	天中軒月子	25人
24 25	11月19日	落語の魅力、楽しみ方	桂三語	23人
26	12月2日	「芸能を育んだまち・ミナミ」	広瀬依子	16人
27 28	12月23日	笑い科学実験（諸芸）体験	ボルトボルズ	31人
29 30	1月6日	腹話術（諸芸）体験	千田やすし	31人
31 32	1月20日	浪曲の魅力、楽しみ方	春野美恵子	29人
33	2月3日	「初代桂春団治が残した『らくだ』」	大西秀紀	29人
34 35	2月17日	講談の魅力、楽しみ方	玉田玉秀齋	27人
36	3月2日	「『にわか』という笑芸能」	荻田清	25人
37 38	3月16日	おもしろ数学・雑学（諸芸）体験	たらちね	22人
39 40	3月23日	ジャグリング（諸芸）体験	渡辺あきら	42人

※ワークショップは2部制で実施

合計 621人

・アマチュア団体との事業連携 ※共催事業

開催回数 33回、参加者数 611人

（開催期間：令和5年4月～令和6年3月）

## 上方演芸の殿堂入り

上方演芸は大阪の誇るべき文化としていつの時代も人々に愛され、受け継がれてきました。それぞれの時代に光り輝き、大勢の観客を楽しませた演芸人があまたおられます。

上方演芸資料館では、平成8年度から、「上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる方」を対象に選考し、「上方演芸の殿堂入り」を決定しています。令和4年度（第26回）までに落語・浪曲・講談・漫才・漫談・コメディアンなど63組100名の方々が受賞されました。

令和5年度（第27回）は、コメディNo.1さん、正司敏江・玲児さんが受賞され、表彰式は、令和6年8月6日にシティプラザ大阪で開催しました。



コメディ No. 1



正司敏江・玲児

(画) イラストレーター成瀬國晴氏

### 「上方演芸の殿堂入り」一覧表

第1回（平成8年度）	初代桂春団治、五代目笑福亭松鶴、横山エンタツ・花菱アチャコ、砂川捨丸・中村春代、二代目旭堂南陵、三代目吉田奈良丸
第2回（平成9年度）	ミスワカナ・玉松一郎、中田ダイマル・中田ラケット、花月亭九里丸
第3回（平成10年度）	六代目笑福亭松鶴、芦乃家雁玉・林田十郎、梅中軒鶯童
第4回（平成11年度）	二代目桂春団治、松葉家奴・二代目松葉家喜久奴、初代京山幸枝若
第5回（平成12年度）	四代目桂米団治、松鶴家光晴・浮世亭夢若、西条凡児
第6回（平成13年度）	二代目桂枝雀、浪花家市松・浪花家芳子、富士月子
第7回（平成14年度）	橘ノ円都、桜川末子・二代目松鶴家千代八、吾妻ひな子
第8回（平成15年度）	都家文雄・都家静代、林家とみ
第9回（平成16年度）	夢路いとし・喜味こいし、横山やすし・西川きよし
第10回（平成17年度）	三代目林家染丸、五代目桂文枝、海原お浜・海原小浜、宮川左近ショー
第11回（平成18年度）	ミヤコ蝶々・南都雄二、人生幸朗・生恵幸子、三代目旭堂南陵
第12回（平成19年度）	ミスワカサ・島ひろし、島田洋之介・今喜多代、京唄子・鳳啓助
第13回（平成20年度）	横山ホットブラザーズ、暁伸・ミスハワイ
第14回（平成22年度）	三代目桂米朝
第15回（平成23年度）	二代目露の五郎兵衛、若井はんじ・若井けんじ
第16回（平成24年度）	上方柳次・上方柳太、岡八郎（コメディアンとして）
第17回（平成25年度）	川上のぼる、木川かえる
第18回（平成26年度）	二代目平和ラッパ、タイヘイトリオ
第19回（平成27年度）	秋田Aスケ・秋田Bスケ、花紀京（コメディアン）
第20回（平成28年度）	三代目桂春団治、二代目春野百合子
第21回（平成29年度）	かしまし娘
第22回（平成30年度）	レッゴー三匹、三遊亭小円・木村栄子
第23回（令和元年度）	笑福亭松之助、Wヤング
第24回（令和2年度）	ゼンジー北京
第25回（令和3年度）	笑福亭仁鶴、初代 真山一郎

第26回（令和4年度）	桂吉朝、今いくよ・くるよ
第27回（令和5年度）	コメディ No.1、正司敏江・玲児

※平成8年度～令和5年度：65組104名

---

## 収蔵資料の紹介

---

### 秋田實作「家」（一幕二場）について

荻田 清

(資料整理・活用部会長)

(梅花女子大学名誉教授)

本資料は、令和3年に島野達雄氏より吉本新喜劇のテレビ放送台本らと共に寄贈された、カーボン複写台本の中の一冊である。漫才作家として偉大な足跡を遺された「秋田實」（注1）の名が出る資料ゆえに、上方演芸資料館年報に少し詳しく紹介しておきたい。

秋田實が残した幅広い業績の中には、松竹新喜劇の作品も知られている。『松竹七十年史』の中座の項を見るだけでも、昭和35年6月中座昼の部、秋田實作・演出「我が家の旗日」を皮切りに、作あるいは作・演出の上演作品が多数みられる（注2）。

しかし、本作は松竹新喜劇の台本ではない。上演記録を見つけていないので、制作年を正確には言えないが、内容から判断して第二次世界大戦直前、または戦中の作品であることはまず間違いない。戦争協力の姿勢は明瞭に出ている。となると、思い起こすのが、『大阪春秋』通巻172号（平成30年秋号）「特集・戦後40年 漫才の父・秋田實とその時代」に紹介された「慰問袋 一幕」である。浦和男氏の解説によれば、「町会隣組お座敷芝居脚本集 第一輯」所収の作品で、その中の「わたしの願ひ」の説明では、「素人演劇よりも、わずかの用意で、いつでも手軽に出来る」もの、「隣組の顔馴染み同士が、演り観る」ための台本という。

この「家」はそれとも異なる。まず、本の外形（書誌）から記すと、「松竹株式会社」の文字が印刷された薄い用紙にカーボン複写した台本。白紙が2枚、墨付は46枚（頁になおすと92頁）。表紙は藁半紙に達筆な文字で「秋田實作／村井富男改訂 家 二場」とある（注3）。改訂者の村井富男は、同じ資料群の中にもう一点出てくる。昭和19年3月角座上演「大阪の勤王町人 藤井藍田」（二幕三場、鷺谷樗風原案・村井富男脚色）。歌舞伎・新劇合同作品などの作者・改訂者として、戦前戦中に活躍しており（注4）、戦後も昭和27年10月中座昼の部、大森痴雪作「松平長七郎」などの演出者として名を顕わす。上方演芸資料館所蔵の中座プログラムによれば、昭和23年5月から昭和29年6月号まで、巻末の観客への「お願い」に、「支配人 村井富男」とあり、後には中座の支配人をも務めた、松竹の中で重用された人であった。本作は松竹系のどこかの劇場で上演するために、秋田實の原作（不明）を、村井富男により舞台用に改訂された作品ということになる。

紙数の都合で、全文翻刻はむずかしいため、以下に、人物の登退場に留意して、あらすじを記してみよう。

秋田 實 作                    家                    二場  
村井富男 改訂

〔第一場 町会の事務所〕

- ・ある街角にある三角形の平屋。秋晴れのある日の午前、賑やかな音楽で幕開く。
- ・町会事務所で婦人部の人たちが、慰問袋に慰問品を詰めている。
- ・丸山照子（12、3）も手伝っている。
- ・町会長の石村（60 くらい）と役員の坂田（63）が話し合っている。
- ・坂田はあだ名が金時さん。日露の戦士、ステテコをはき、胸に子供のような丸い腹巻をしている。
- ・石田は坂田の作った時勢を詠んだ小唄の歌詞に作曲しているが、いいのができない。おはら節や草津節など、どこかの民謡の節を取り入れるだけという滑稽。
- ・婦人たち、慰問袋の作業を終える。「坂田、剽軽にお辞儀する」。
- ・婦人たちの茶のみ話。兵隊さんから慰問袋に感謝されて、結婚を申しこまれたらどうしようとする一人が言う。「五十を過ぎてちや悪いわね」「そこは思ひやうで、廿五の娘さんを一遍に二人奥さんに貰ふとおもへば……………」などの会話。
- ・照子の父は兵隊で、外地へ行っている。母もおらず、祖母に面倒をみてもらっている。
- ・照子は慰問袋から父のことを思う。そのようすに婦人たちの中には涙ぐむ人もいる。
- ・照子、父からは手紙が来ないが、少年航空兵になった兄の繁からは、先日練習機にはじめて乗ったという知らせがあったという。「兄さんは飛び立つ思ひですって」。
- ・町内の五十嵐夫人が来て、子供が病気なので、病人に食べさせる滋養物の証明書をもらいに来る。
- ・石村は、子供を甘やかすなと夫人をたしなめる。坂田は茶化してとりなす。
- ・証明書を持って行きかけた五十嵐夫人が、戻ってきて、近頃畑が荒らされて困っていると訴える。
- ・坂田は、その犯人は「夜更けにボロ自転車を持って歩く婆アだ」という噂を話す。
- ・照子は、それを聞くと、逃げるように帰る。
  
- ・坂田は町内に住む元芸者の児島隆子に、作曲を頼もうということになる。
- ・婦人たちは慰問袋を出しに行くため、リヤカーに載せて、曳いて、退場する。
- ・石村は坂田に、児島隆子と姑が、財産争いで裁判中だという話をする。
- ・石村は古い考えで、姑に肩をもち、坂田は嫁の隆子の肩をもつ。
- ・その噂最中に、児島隆子（28、9）が来る。
- ・坂田は自分の作った歌詞を見せる。
- ・隆子は、いい文句だが依頼に応えられない、故郷へ帰るので、居住証明書を取りにきたのだという。
- ・石村は、持論の「家」の考えを述べる。坂田がとりなす。隆子も徐々に心を開き、これまでのことを素直に述べる。



・隆子は、子供ができなかったために、夫の死後、姑との確執を生んだのではないかと嘆く。親類の人たちからは、ひどい中傷も受けたと訴える。裁判では自分が勝ったのだが……と告げて、帰ろうとする。

・照子、隆子と出会う。

・照子は祖母から頼まれて、出征遺家族慰安会の招待状を持参。祖母は行けないので誰かにあげて下さいと言って、帰る。

・町会事務員の町田が来て、畑泥棒は照子の祖母丸山つねらしいと伝える。「暗転」。

## 〔第二場 公園の中〕

・町はずれの空き地の一部を手入れしただけのもの。夜九時半頃、星月夜。

・石村が詩吟をうなり、剣舞のまねをしながら公園に来る。

・そこへ丸山つねが来る。石村隠れる。

・つねは照子と、子供用の自転車を持って来る。

・石村は、つねと照子を畑泥棒と思い込んでいるので、とんちんかんなやりとりとなる。

・つねの述懐。祖母育ちの繁が一人前の航空兵になれるのか心配しており、自分も孫に負けずに、自転車の練習に励んでいるのだという。

・児島隆子がポストンバッグを持って、故郷へ帰ろうとして、公園にさしかかる。

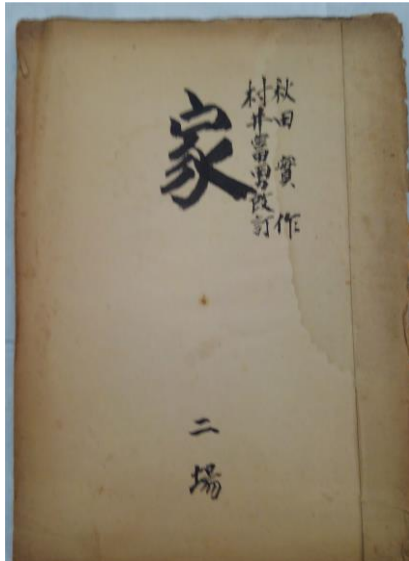
・隆子は人がいるので隠れる。つねの家族思いのことばに心うたれ、つねの前に出る。

・つねは隆子に、姑を実の母親として仕える道も大切だと説く。

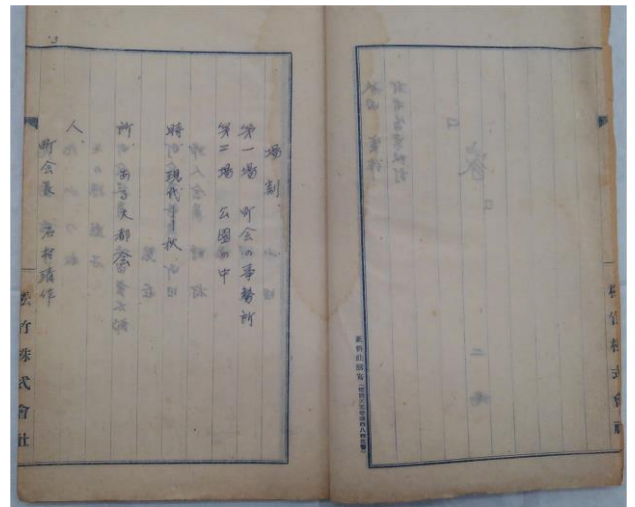
・隆子は、「力強く大股で」元の家へ帰って行く。

・石村と照子が助けながら、つねは自転車の稽古を続ける。「この中に“幕”」

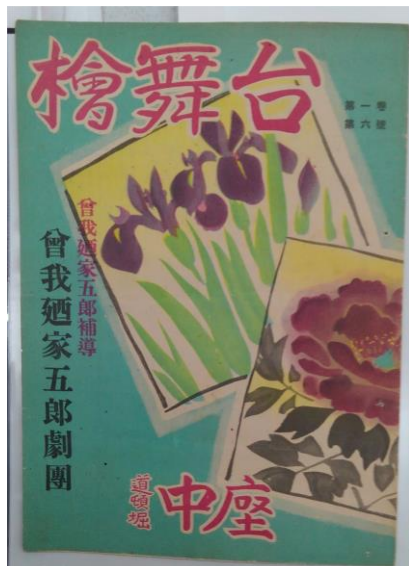
あらすじでわかるように、教訓と笑いを含んだ舞台用の台本である。「坂田」のような個性的な人物も描かれており、民謡を歌う場が入るなど、プロの役者の演じる台本と見てさしつかえないと思う。吉本興業で活躍していた秋田實が松竹に移籍してからのものであることは、确实だと思われる。藤田富美恵著『秋田實 笑いの変遷』（中央公論新社 2017年9月）に、秋田實が戦地の長沖一に出した手紙（昭和17年1月24日付）の一部が紹介されている。「去年一年を振り返って見ると、全体として仕事の中心も無かったようだ。松竹では大物扱いされるだけで、こちらでは打ち込む気になれず。……」とある。この時期に、村井富男との出会いがあって、松竹系の舞台用に書いた作品ではないかと、今は推測しておく（注5）。



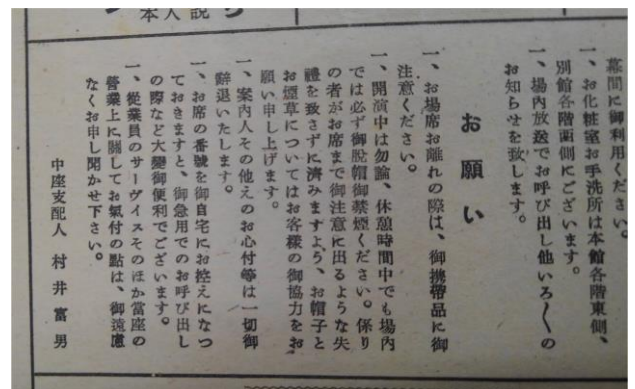
図版1 表紙の写真



図版2 本文2・3頁見開き



図版3 昭和23年2替り「檜舞台」第1巻第6号の表紙



図版4 昭和23年2替り「檜舞台」第1巻第6号の最終頁

(注1)「實」で統一した。なお、現在では歴史的な人物と認められる秋田實、村井富男・香川登志緒などには、敬称を略した。

(注2) もう少し例示すると、昭和36年5月中座、秋田實作・演出「家に一男三女あり」、昭和37年2月中座夜、秋田實作「花嫁の父親」、昭和37年4月中座、秋田實作「まちはそよ風」など。

(注3) 藁半紙に墨書の形は、寄贈され手書きカーボン複写の台本58点に共通しているもので、後に整理されたときにつけられたものと思われる。

(注4) 昭和12年12月角座大江美智子一座三の替り村井富男作「間諜史」、昭和16年4月角座新旧合同劇、竹内義男作・村井富男脚色「戦陣夜話・男子なれば」、昭和18年3月中座夜之部厚生劇・関西歌舞伎・東京劇団新派、村井富男作・早瀬亘演出「木曾路の夜明け」など。

(注5) 秋田實の松竹移籍に関しては、微妙な問題があるようだ。香川登枝緒著『大阪の笑芸人』(晶文社 1977年10月)に香川と秋田の対談が少し載っている。その中の秋田のことばとして「…………ワカナ個人でなしに新興演芸部のなかの一人として仕事をしよう。…………ワカナの漫才の台本だけでなく芝居も何本か書きました…………」。新興演芸部は紛れもなく松竹の傘下。松竹としては大劇場用の演劇台本をも秋田に求めたのではないだろうか。

【前稿訂正】

『令和4年度 年報』に掲載しました拙稿「浪花二〇〇カまち請角力」中に、一部記載誤りがありましたので、訂正します。

P17 L26 前頭 同 魚萬 → 前頭 同 角萬

P18 L24 魚萬は、亀水亭魚萬。『忠臣蔵俄噺』(天保十五年〔1844])という本を残している。

→角萬は、亀水亭魚萬とは別人。魚萬は『忠臣蔵俄噺』(天保十五年〔1844])という本を残している。

---

## 収蔵資料の紹介

---

### 軽口のレコード三種

大西 秀紀

(資料整理・活用部会委員)

(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員)

漫才という演芸は、今日のスタイルにいたるまでに、それぞれの時代に人気のあったさまざまな芸能を取り込みながら進化を遂げてきた。そしてその動きは今も続いている。漫才に大きな影響を与えた芸能のひとつに「軽口」がある。昭和の初め頃には廃れてしまったため、今日その姿をイメージすることは難しいが、幸いにもいくつかの SP レコードが残された。本稿では大阪府立上方演芸資料館所蔵の「軽口」のレコードをご紹介します。

#### ニワカと軽口

江戸時代から明治にかけて、京阪や江戸（東京）ではニワカ（俄、仁輪加、二〇加とも書く）が流行した。始まりは素人の即興喜劇だったが、次第に職業化して専用の劇場を持つようになり人気を博した<sup>(1)</sup>。それらの舞台上でニワカが始まる前に、二人の演者が正座をして演じる滑稽な掛け合いが軽口である。舞台ニワカは扮装をするが、軽口はニワカのポテ鬘は被らず、衣装も着流しで演じた。前田勇『上方まんざい八百年史』に花月亭九里丸による明治3、40年代の軽口についての回想が記されている。やや長いが軽口の舞台を詳細に述べているので、その一部を次に引用する。

大阪ならば千日前の改良座とたにしの席（※柴田席）。京都なら新京極の大虎座の二輪加芝居のプロローグとして、一人の男が客足まばらな時分に舞台の浅葱幕の外へ現れて、拍子木を耳喧しく板の間へ叩きつけて、一と言二た言を喋ってから、「おーい楽屋の色男、ちょっとこゝまで黄な粉餅」と、楽屋からコンビになる男を呼び出す。すぐさま心得たりと飛出して来て、「なにか羊羹幾代餅」（※「出るが早いか、えらいシャレやなァ」というと、）重ねて「お洒落の蒲焼鱈汁」「いや大けにご苦労さん」「いや大けに十苦労さん」「なんや十苦労さんなんて」「ご苦労さんを、私とあんたの二人分を合して十苦労さん」「いらん勘定はせえでもえゝ。これから二人してこの舞台を持ちますのや」「阿呆かいなこの人、こんな大きい、こんな重たい舞台を、私とあんたのタッタ二人で持つ、あかん／＼逆もそんな力があるもんかいな」

（中略）

先ずこれが紋切型の対話で、年中同じ文句を繰返す。これから芝居となって、忠臣蔵の喧嘩場も十分笑わせるし、判官の切腹、山崎街道は軽口のなかでも大物格で、勘平の血判、茶屋場のお軽と平右衛門との遣り取りは、軽口としては圧巻だ。他には鏡山奥庭の岩藤の綱渡り。本町綱五郎、新町橋。お半長右衛門桂川。曾我の手洗鉢。道中八景。宝蔵。名鳥名木と、芸

題の数も沢山にある。《同氏著・大阪を土台とした寄席楽屋辞典》※印は前田勇の加筆（以下略）

(2)

このように二人の演者による定型のやり取りの後に、歌舞伎を題材にしたネタや「名鳥名木」「〇〇問答」「□□廻し」「△△尽くし」といった言葉遊びのネタが演じられた。軽口は当然のことながらニワカ師が演じたが、次第に噺家から軽口に転向する者も現れた。桂梅団治・篤団治のコンビがその第一号で、桂花咲（後の一輪亭花咲）、桂次郎坊、桂太郎坊らがこの系列である。またニワカの系列では秋の家稲子・稲八、鶴家団七・団鶴、さらには漫才師としても活躍した林田十郎、一輪亭花蝶、東五九童らがいる<sup>(3)</sup>。



図1 「軽口 主従」  
オリエント 1095（当館所蔵）

### 軽口レコード三種

大阪府立上方演芸資料館所蔵の軽口のレコードは以下の三種である。

#### 1) 「軽口 主従（三銭返やせ）」（図1）

栗亭東寿・志賀廻家秋月 オリエント A1095/A1096（大正 5-6 年発売）

（資料コード：00680891）

栗亭東寿は明治・大正期に京都・新京極の大虎座に出演していた栗亭東玉一座のニワカ師。相方の志賀廻家秋月は、志賀廻家淡海一座の役者である<sup>(4)</sup>。栗亭東玉は同じオリエントにニワカの録音を7枚残しているが<sup>(5)</sup>、東寿はその内の6枚に参加している。

内容は「主従」というタイトルの通り、ひとりが主人に、もう一方が家来となり、鉄砲で大殿暗殺を企てるという筋が歌舞伎仕立てで繰り広げられる。ただプライベートで家来役が主人役に立て替えたうどん代三銭を、主人役が未だに返さないの、芝居のあちこちで「三銭返やせ」と訴えるのが滑稽のツボになっている。紙数の都合で全部は紹介出来ないが、本題に入るまでのやりとりは次の通りである。

「イ：サア」「ロ：サア」「イ：おおきにご苦労はんでした」「ロ：イヤ、どういたしまして」「イ：ひとつ何かいかならんよって」「ロ：サア／＼」「イ：立ち上がってひとつ、さっそくいきやしょ」「ロ： サア／＼」「イ：さしずめ」「ロ：ハア」「イ：アンタと私とや」「ロ：ハア／＼」「イ：ひとつここで主従というのをいきやしょう」「ロ：主従という」と「イ：つまり旦那と家来」「ロ：なるほど」「イ：ハア」「ロ：私がさしずめ旦那か」「イ：アカン／＼」「ロ：なんで」「イ：アンタは旦那がでけん」「ロ：なんで」「イ：アンタは家来顔や」「ロ：顔に家来顔の旦那顔ちゅうて区別がおまんのか」「イ：ヘエ今そんな縞柄、皆家来に回らんならん」「ロ：ヘエー」「イ：アンタに家来いってもろて、私が旦那じゃ」



このようなやりとりが軽快なテンポで続く。二人の役割はイの旦那役がいわゆるツッコミで、ロの家来役がボケである。ここでは前記の九里丸の回想にあるような「おい楽屋の色男、ちよとこゝまで黄な粉餅」といったやりとりは見られないが、「おおきにご苦労はんでした」「イヤ、どういたしまして」の会話は、定型のやりとりを済ませた後であることを窺わせる。また「立ち上がってひとつ、さっそくいきやしょ」という言葉は、それまで舞台上に正座していたが、これから立ち上がって「主従」の本題へ入ることを意味していると思われる。また表面は出囃子で始まり、裏面は下囃子で終わる。



図2 「掛合軽口 萬歳」  
ニッポノホン 3796（当館所蔵）

## 2) 「掛合軽口 萬歳」(図2)

桂花咲・桂次郎坊 ニッポノホン 3796/3797 大正9年3月発売(資料コード:00134023)

上方の噺家出身のコンビである。桂花咲(1889-1981)は大阪生まれで、明治42年(1909)に六代目林家正楽へ噺家として入門し右楽を名乗り、さらに右郎坊を経て二代目花咲を襲名した。大正13年(1924)に落語界を離れ、ニワカ師として一輪亭花咲と改め、晩年は最後のニワカ師として活躍した<sup>(6)</sup>。このような軽口<sup>(7)</sup>以外にも、桂花咲名義で落語のレコードや<sup>(8)</sup>、一輪亭花咲名義で漫才のレコード<sup>(9)</sup>も残している。相方の桂次郎坊については生没年や本名、出身地等の情報は不詳だが、明治末期に三代目桂文三に入門し次郎坊を名乗ったとされる。桂太郎坊と組んで軽口で売りだしたが、大正に入ってから失明し、相方を桂右郎坊(後の桂花咲)に替えた<sup>(10)</sup>。SPレコードも残したようだが、レーベルや発売時期等の詳細は不詳である<sup>(11)</sup>。

軽口の萬歳というややこしいタイトルだが、この萬歳は演芸ではなく、さまざまな萬歳唄の歌詞をつなぎ合わせた地歌の「萬歳」を指す。一人がこの「萬歳」の一節を間違った歌詞で唄い(三味線伴奏付き)、それに対して相方がツッコみながら、次のように軽口は進む。

(前略)

「ロ：ゞ徳利割って御免候へと」「イ：ちょっと待った」「ロ：エー」「イ：そんな無茶言うたら具合悪いナ」「ロ：左様か」「イ：徳若に御萬歳やで」「ロ：でもワテのは徳利割った」「イ：何時いっィ」「ロ：昨夜ゆんべ」(以下略)

このような調子で僅かな歌詞に対してボケとツッコミが繰り返されるので、「萬歳」は遅々として進まない。

1)の京都のニワカ系軽口の東寿・秋月と同様に、このレコードでも、「サア」「サア」「ご苦労はんでした」「ご苦労はん」とお互いを労いながら始めるところが共通しているのは興味深いところである。また表面は出囃子で始まり、裏面は下囃子で終わる。



3) 「掛合軽口 お笑い草／りんまわし」(図3)  
桂花咲・桂次郎坊 ニッポノホン 4392/4393  
大正10年9月発売(資料コード:00473611)

2)と同じコンビによる録音だが、冒頭の「ご苦労は  
んでした」「ご苦労はん」のやりとりは見られない。表  
面の「お笑い草」は「アンタ歌は好きか」という問いか  
けに、相方は好きだと答えるものの、それが歌ではなく  
「イワシのヌタ」だとボケる。「ヌタやおまへん、ワタ  
シが言うのはウタ」とツッコむとここから、「釜の上に  
載せてある」「あれはフタや」「今踏んでいるところ」  
「これは板」「荷物を担げるところ」「あれは肩」とい  
うようなボケとツッコミの応酬が計6回繰り返され  
る。その後狂歌の「りんまわし」の由来の説明になり、裏面の  
実例に続く。「りんまわし」とは狂歌の趣向のひとつで、  
初句が「りんりんと」、二句が「りんと○○○○」、そして  
結句を「××△りん」と、最後を「りん」でまとめるとい  
う言葉遊びである。

「りんりんと、りんと鳴ったる電話口、話しが済めば後がちりりん」

「りんりんと、りんと医学の博士号、試験受けたは、ドイツベルリン」

「りんりんと、<sup>りんず</sup>縷子や羽二重高うつく、襦袢の袖は得なモスリン」

裏面では上記3首を含む計12首が詠まれている。

幕末頃から発達し庶民の支持を得たニワカだが、明治30年代に興った曾我廼家兄弟劇を始めとする新しい喜劇に押され、次第に衰退の途をたどったとされる。それに反してニワカから派生した軽口は人気を得てやがてニワカから独立し、軽口の席を持つようにもなった。しかし大正末頃から漫才(万才)が盛んになり寄席に進出し始めると、やがて軽口師たちも漫才を名乗るようになり、昭和初期には漫才に統一されたという<sup>(12)</sup>。

今回取り上げたレコードは2組のコンビの計3枚で、ここから軽口の芸態を云々するのは難しい。音を聞く限りではこれらの軽口と、同時期の砂川捨丸や若松屋正右衛門の漫才との違いは、正直なところ区別できなかつた。ただ大正期には、掛合のしゃべくりの技術がすでに完成されていたことは十分に確認できる。

【註】

(1) 河竹繁俊編『演劇百科大事典』、第4巻、平凡社、1961、pp.348-349

(2) 前田勇『上方まんざい八百年史』、杉本書店、1975、pp.130-148

(3) 同(2)

(4) 今井信『近江の名曲 淡海節』、サンライズ出版、2020、p.27

(5) 粟亭東玉一座のニワカレコードは次の7枚。すべてオリエントレベルである。

「関西名物 二輪加三方正面」、粟亭東玉、東寿、寿江広狸、A1093/A1094、大正5-6年?



図3 「掛合軽口 お笑い草」  
ニッポノホン 4392 (当館所蔵)

- 「関西名物 二輪加塩谷判官綱渡り」、粟亭東玉、東寿、A1117/A1118、大正 5-6 年？
- 「関西名物 二輪加御殿違ひ」、粟亭東玉、東寿、A1199/A1200、大正 6 年
- 「関西名物 二輪加さびがたな 大星廓遊び」、粟亭東玉、東寿、A1201/A1202、大正 6 年
- 「関西名物 二輪加脱線稽古屋」、粟亭東玉、東寿、A1269/A1270、大正 6 年 10 月
- 「関西名物 二輪加忠臣蔵茶屋場」、粟亭東玉、東寿 A1289/A1290、大正 6 年 11 月
- 「忠臣蔵二ツ玉」、粟亭東玉、東八、1441、大正 7 年 8 月
- (6) 諸芸懇話会・大阪芸能懇話会編『古今東西 落語家事典』、平凡社、1989、p. 397
- (7) 本稿掲載分以外の桂花咲・桂次郎坊の軽口レコードは次の 2 枚が見られる。
- 「軽口 ちう廻し」、桂花咲・桂次郎坊、オリエント 1840、大正 10 年 6 月
- 「長短かっぽれ」、桂花咲・桂次郎坊、オリエント 1890、大正 10 年 11 月
- (8) 「八幡由来」、桂花咲、ニッポノホン 4402/4403、大正 10 年 8 月
- 「京染め」、桂花咲、ニッポノホン 4404/4405、大正 10 年 8 月
- (9) 「滑稽宮本武蔵」、桂花咲・桂花柳、ニットー2684、昭和 2 年 10 月
- 「姓名判断」、桂花咲・桂花柳、ニットー2713、昭和 2 年 12 月
- 「アイノコ弁当」、桂花咲・桂花柳、ニットー2864、昭和 3 年 4 月
- 「そら恐ろしい」、三遊亭川柳、一輪亭花咲、ニットー6685、昭和 10 年 3 月
- ニットーには次の一輪亭華咲名義のレコード 6 種が存在する。恐らく花咲と同一人物と考えられるが確証は得ていない。
- 「映画万才 明烏」、一輪亭華咲、華柳、華嬢、囃子連中、ニットー2761、昭和 3 年 1 月
- 「映画万才 朝顔日記」、一輪亭一行、他囃子連、ニットー2803、昭和 3 年 2 月
- 「映画万才 安珍清姫」、一輪亭一行、他囃子連、ニットー2836、昭和 3 年 3 月
- 「映画万才 弥次喜多（出発の巻）」、一輪亭一行、他囃子連、ニットー2900、昭和 3 年 5 月
- 「映画万才 弥次喜多（地獄廻り）」、一輪亭一行、他囃子連、ニットー2931、1928 年 6 月
- 「映画万才 弥次喜多（地獄荒し）」、一輪亭一行、他囃子連、ニットー2967、1928 年 7 月
- (10) <https://ja.wikipedia.org/wiki/桂次郎坊>（参照 2024 年 9 月 2 日）
- (11) YouTube 桂次郎坊「伊勢土産（もぎとり）」  
<https://www.youtube.com/watch?v=thmHMNgK3qs>（参照 2024 年 9 月 2 日）
- (12) 織田正吉「万才の歴史」『上方演芸大全』、創元社、2008、p. 29

## 展示資料の紹介

### 企画展

#### 「What is 上方演芸？～上方演芸って何だろう？～」展の紹介

中西 賀信(上方演芸資料館学芸員)

##### 1. はじめに

大阪府立上方演芸資料館（愛称：ワッハ上方）には、常設展示エリアと企画展示エリアがある。企画展示エリアでは、「上方演芸の殿堂入り」を果たした演芸人に焦点をあて、その方の芸や功績を紹介する「特別展示」と、様々な切り口で上方演芸の魅力を紹介する「企画展示」を開催している。

令和5年度下期は企画展示「What is 上方演芸？～上方演芸って何だろう？～」を開催した。その概要と展示資料について紹介する。

##### 2. 展示の概要

ワッハ上方は平成31年にリニューアルを行い、リニューアル後5年目にあたる令和5年度は、あらためて「上方演芸」を知っていただき、その楽しさをお伝えするため、今回の企画展「What is 上方演芸？～上方演芸ってなんだろう？～」を開催した。展示では、各演芸のコーナーを設置し、演芸人や演芸にまつわる資料を出展した（図1）。



図1 企画展示の様子

##### 2.1 落語コーナー

落語とは何かについてパネルで説明するとともに、江戸落語との違いについても説明を加えた。展示資料は、初代桂春団治のレコードと歌詞、懐中時計、五代目笑福亭松鶴が中心となって出版した上方はなし、戦後、多くの弟子を育て落語の復興に尽力し、後に“上方落語四天王”と呼ばれた六代目笑福亭松鶴、三代目桂米朝、三代目桂春団治、五代目桂文枝がそろった落語会のレコードなどを出展した。

##### ◆ 落語展示資料の例

\* 「上方はなし第49集」（資料コード 00552588、190×130mm、52頁）

昭和初期には、産業構造の変化などから都市部への人口が集中し始め、大衆受けする娯楽が漫才などに変化していった。そんな中、爆笑王の名をほしいままにし活躍した初代桂春団治が昭和9(1934)年に亡くなると、寄席は漫才中心となっていく。

「このままでは上方落語は減ぶ」と危機感を抱いた五代目笑福亭松鶴は、今里の自宅を「楽語荘」と名付け同人を組織し、機関誌として雑誌「上方はなし」を昭和11(1936)年に創刊、統制令による紙不足で終刊となる昭和15(1940)年の49号(図2)まで発行した。この最終号の49号では、笑福亭松鶴の落語「鴻池の犬」が掲載されている。口絵にはその「鴻池の犬」を得意とした三代目桂文団治が掲載され、「本集に掲げた「鴻池の犬」は最も優れたものとの定評あり。」また、「全身に見事なる刺青を施せしは克く人の識る処。」との紹介がある。本号では最終刊になるという記載がないことから、予定外の終刊であった。

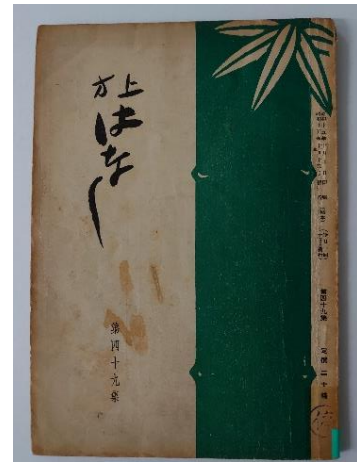


図2 上方はなし第49集

なお、復刻版も昭和46(1971)年に出版されているが、現代仮名遣いに直されており、一部の広告が省略されているなど、現物とは違っている。

## 2.2 漫才コーナー

漫才とは何かについてパネルで説明するとともに、上方漫才中興の祖「玉子家円辰」、しゃべくり漫才の祖「横山エンタツ・花菱アチャコ」、昭和40~50年代を代表する漫才師「横山やすし・西川きよし」の写真、平成の若手漫才師の公演ポスター、「笑の会」東京公演のチラシ、昭和55(1980)年から始まった「MANZAIブーム」時のレコードなどを出展した。

### ◆ 漫才展示資料の例

\* 「笑の会」東京公演チラシ (資料コード 00628354、260×184mm)

前回の大阪万博が開催された昭和45(1970)年からの漫才ブームが去り、人気にかげりが見え始めると、漫才の低迷を心配して、漫才作家の秋田實氏と読売テレビが昭和50(1975)年に、若手漫才師と漫才作家の育成を目的として「笑の会(しょうのかい)」を発足させた。秋田實氏没後、「笑の会」村長に就任した藤本義一氏の提案により、一周忌の昭和53(1978)年11月に第1回東京公演が行われることになった。その第1回公演チラシである(図3)。公演のポスターは、「上方演芸の殿堂入り」のイラストを描いている成瀬國晴氏が藤本義一氏の依頼によりデザインした。本チラシはポスターを縮小したものと思われる。翌年の昭和54(1979)年10月に行った第2回東京公演では、文化庁芸術祭・大衆芸能部門の優秀賞を大阪の漫才としては初めて受賞した。メンバーには、ザ・ぼんち、B&Bなどがいて、昭和55(1980)年から起こった次の漫才ブームをけん引するようになる。



図3 第1回東京公演チラシ

文化庁芸術祭は、昭和21(1946)年以来毎年秋に開催される芸術の祭典である。参加公演・参加作品については、それぞれの部門で公演・作品内容を競い合い、成果に応じて文部科学大

臣賞（芸術祭大賞，芸術祭優秀賞，芸術祭放送個人賞，芸術祭新人賞）が贈られることになっている。

笑の会が優秀賞を受賞した際には、「優秀賞の『大阪若手漫才集団笑の会』は、上方漫才の良さを東京に伝えようと、関西で活躍する漫才勢力が、芸術祭の際に大挙上京、その芸を披露した。『とくに横山やすし・西川きよしの縦横無尽の話芸は、現代漫才の一つの頂点をきわめたもの』（授賞理由）と激賞された。」と朝日新聞で紹介された。（昭和54（1979）年12月14日、東京版、13版、22頁）

## 2.3 講談コーナー

講談とは何か、落語との違いは何かについてパネルで説明するとともに、戦前、戦後の上方講談を一人、もしくは親子二人で支えた二代目、三代目旭堂南陵の資料を中心に展覧した。

また、立川文庫（たつかわぶんこ）第一編である「諸国漫遊一休禅師」を展覧した。

### ◆ 講談展示資料の例

\* 玉田玉秀齋「諸国漫遊一休禅師」（資料コード 00253484、125×90mm、319頁）

池田蘭子著『女紋』によると、立川文庫は、四国今治の回船問屋「日吉屋」から二代目（三代目ともいう）玉田玉秀齋（当時は玉麟）と出奔した山田敬の長男阿鉄が、すでに発行されていた「袖珍文庫」（東京・三教書院 縦13cm×横9cm）にヒントを得て小型講談本を思いつき、玉秀齋が大阪の主要な出版元に持ち込むが相手にされず、唯一立川文明堂の立川熊次郎が受入れたことにより誕生した。本の装丁は、玉秀齋一家が考え、色は濃い緑、表紙の浮き押し模様は敬の提案により日吉屋の女紋である揚羽蝶に決まった。第一編は、玉秀齋得意の「一休禅師」となった。

展覧した「諸国漫遊一休禅師」をみていくと、表紙の右下に揚羽蝶の浮き押し模様が確認できる（図4）。

また、奥付では「明治四十四年四月十日印刷、同年四月十五日発行、同年十二月十日六版、述者 加藤玉秀（玉田玉秀齋のこと）」となっている（図5）。奥付が「明治四十四年四月十日印刷、同年四月十五日発行」となっている国立国会図書館デジタルコレクションの同書目次と同じであることから、初版と同じ内容と考えられる。なお、国立国会図書館デジタルコレクション「頓智奇談諸国漫遊一休禅師」（大正七年八月一日印刷、大正七年八月五日発行）は著者名がペンネームでよく使われた「雪花山人」になっており、収められている話も増えている。

本文庫本の「手紙の判じ物」では、宗「イヤ孫<sup>まご</sup>左衛門<sup>さゑもん</sup>さん、あれはお前<sup>まへ</sup>がわからない、假名<sup>かな</sup>でこのはし<sup>わ</sup>渡るべからずと書いてあるから、端し<sup>はし</sup>を渡らないで、中央<sup>まんなか</sup>を<sup>と</sup>ほって来た、・・・」（原文のまま）など、アニメでおなじみのとんちが書かれている。なお、宗とは宗純で一休禅師のこと。

立川文庫は、旧本に三銭をそえると、新刊と取り換えるという貸本屋システムにより、当時の少年店員や小学生らにひろく愛読された。大正期に第四十編「真田三勇士 忍術名人 猿飛佐助」が発行されると、活動写真（映画）にも取り入れられ、またたく間に少年達のヒーローとなった。また、明治期に一般的であった速記講談の形態を改め、書き講談の方式を定着さ



せ、大衆小説の先駆的な役割をはたした。このように大正文化として、大衆文学・児童文学の前史として、無視できないものとなった。

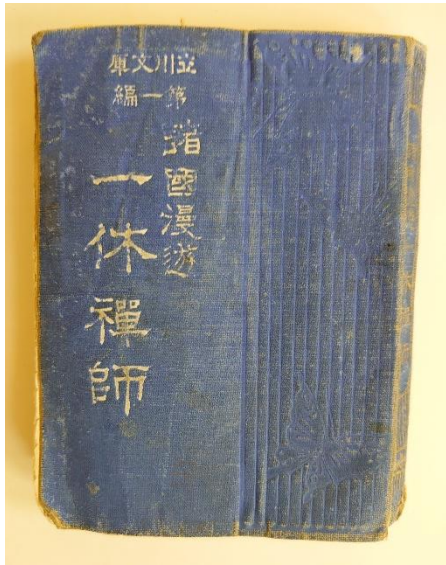


図4 立川文庫「諸国漫遊一休禪師」表紙

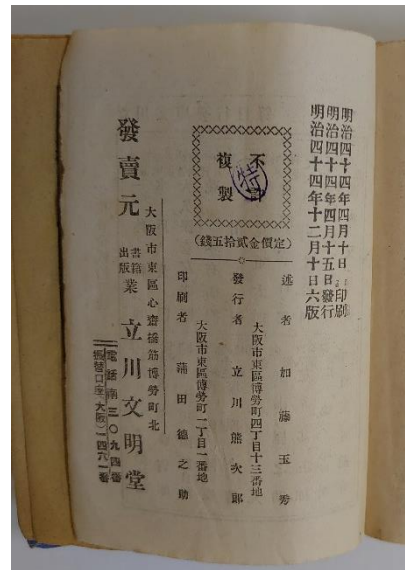


図5 立川文庫「諸国漫遊一休禪師」奥付

## 2.4 浪曲コーナー

浪曲とは何かについてパネルで説明するとともに、梅中軒鶯童のテーブル掛け、富士月子のレース地の着物、京山小圓嬢の扇子、浪曲番付、一心寺門前浪曲寄席のチラシなどを出展した。

### ◆ 浪曲展示資料の例

\* 一心寺門前浪曲寄席チラシ (資料コード 00633503、257×182mm)

浪曲の人気は昭和50(1975)年代後半から平成にかけ、ベテラン浪曲師が亡くなったり引退したりして、一気に衰退していった。また、劇場での浪曲大会が減っていった。そんな中、浪曲関係者は、寄席の再興に取り組み、平成6(1994)年に「毎月3日間ですが浪曲の寄席が出来ました」といううたい文句で、もと花卉市場のトタン張りの倉庫を改装した一心寺シアターで、「一心寺門前浪曲寄席」が始まった。その第1回(平成6(1994)年7月)のチラシである(図6)。

「一心寺門前浪曲寄席」は現在まで継続されており、令和6(2024)年11月現在第365回となっている。

第1回、2回の出演者は以下のとおりである。

◇第1回(平成6(1994)年7月11日～13日)出演者

○京山小圓嬢



図6 第1回一心寺門前寄席チラシ



昭和21(1946)年、京山小太夫に入門。昭和46(1971)年、二代目京山小圓嬢襲名。平成25(2013)年度文化庁芸術祭大賞受賞。

○廣澤駒蔵

昭和24(1949)年、二代目廣澤駒蔵に入門。昭和36(1961)年、音楽ショウスカタンボーイズを結成。浪曲界へ復帰後、昭和46(1971)年に三代目駒蔵を襲名。けれん読みで活躍。

○松浦四郎若

昭和45(1970)年、松浦四郎に入門。「勸進帳」「太閤記」など多数の古典の演目を得意とする一方で新作にも精力的に取り組む。平成21(2009)年度文化庁芸術祭優秀賞受賞。

○長谷川公子

昭和17(1942)年、東光軒宝玉に入門。修業明けから梅中軒鶯童の指導を受ける。「面影」「妻恋道中」など女流らしい読み物が多くを占める。

◇第2回(平成6(1994)年8月8日～10日)出演者

○春野百合子

二代目吉田奈良丸と初代春野百合子を両親に持った、女流浪曲の第一人者。昭和23(1948)年、道頓堀中座での初舞台で二代目百合子を襲名。天賦の才に恵まれ、情緒豊かな世話物の世界に秀でるなど、浪曲界に大きな足跡を残した。平成28(2016)年度上方演芸の殿堂入り。

○京山福太郎

現在の二代目京山幸枝若。昭和48(1973)年、父である初代京山幸枝若に入門し福太郎を名乗る。父譲りの声節で若くして人気者に。平成16(2004)年、二代目京山幸枝若を襲名。代表作は「会津の小鉄シリーズ」「左甚五郎シリーズ」など。令和2(2020)年度文化庁芸術祭大賞受賞。令和6(2024)年、浪曲界初の人間国宝に認定される。

○京山宗若

昭和61(1986)年、京山幸枝栄に入門。昭和62(1987)年、宗若を名乗る。平成23(2011)年、二代目幸枝司を襲名。河内音頭で慣らした明るさいっぱいの舞台が魅力であった。

○春野ココ

平成6(1994)年、春野百合子に入門。太宰治の『お伽草子』をもとに作家の大西信行が提供したお伽浪曲「カチカチ山」「舌切雀」などを持ちネタとする。

## 2.5 諸芸コーナー

諸芸とは何かについてパネルで説明するとともに、令和4(2022)年度の当館年報の表紙写真に掲載した二代目一輪亭花咲のぼてかづら、実際に当人がぼてかづらをかぶって諸芸の一つである「にわか」を演じている写真を出展した。

### <参考文献>

大阪府立上方演芸資料館『上方演芸大全』、創元社、2008

諸芸懇話会、大阪芸能懇話会『古今東西落語家事典』、平凡社、1989  
桂米朝『落語と私』、ポプラ・ブックス、1975  
藤本義一監修『笑いの戦記-笑の会の全記録-』、創元社、1985  
池田蘭子『女紋』、河出書房新社、1960  
加藤玉秀『諸国漫遊一休禪師』、立川文明堂、1911、国立国会図書館デジタルコレクション  
雪花山人『頓智奇談諸国漫遊一休禪師』、立川文明堂、1918、国立国会図書館デジタルコレク  
ション  
尾崎秀樹『解説 立川文庫』、講談社、1974  
足立巻一『立川文庫の英雄たち』、文和書房、1980  
足立巻一『大衆芸術の伏流』、理論社、1967  
相羽秋夫『現代上方演芸人名鑑』、少年社、1980

## 上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等

### 【経緯】

- 平成元年3月 故砂川捨丸氏の遺族から、氏が愛用された貴重な鼓を大阪府に寄贈
- 平成2年1月 貴重な資料の散逸を防ぎ、大阪が誇る文化遺産である「上方演芸の歴史」とともに後世に残していく必要があるとして、「上方演芸保存振興検討委員会」（会長：井上 宏 関西大学教授）を設置
- 平成4年3月 同委員会において「上方演芸保存振興事業基本構想」を取りまとめ、資料館の設置を提言
- 平成5年12月 大阪府において、資料館の立地場所を大阪市中央区難波千日前に決定
- 平成6年7月 基本構想を受け、大阪府において資料館に関する基本計画を策定
- 平成8年3月 大阪府立上方演芸資料館条例を公布
- 同年8月 3,000を上回る一般公募の中から資料館の愛称が「ワッハ上方」に決定
- 同年11月 展示室、演芸ホール、演芸サロン・資料室、レッスンルームや収蔵庫等から構成される有料施設として、大阪府立上方演芸資料館がオープン
- 平成20年2月 大阪府が「財政非常事態」を宣言し、全ての事業、出資法人及び公の施設をゼロベースで見直すこととし、資料館もその対象となる
- 平成21年12月 「大阪府戦略本部会議」において、「資料館が今後も果たすべき役割は、資料の収集・保存、資料の活用（展示・ライブラリー）、レファレンスサービスであり、「公演」「育成」は民に委ねる」との方針を決定
- 平成22年12月 演芸ホールを廃止
- 平成25年1月 「大阪府戦略本部会議」において、「当面は、現地において、常設展示を縮小し、より効率的な運営を行い、無料での利用に供するとともに、巡回展示や大学との連携等による研究機能の充実など新たな展開を図る」との方針を決定
- 同年4月 展示室・レッスンルームを廃止するとともに、入館を無料とする
- 平成26年7月 「大阪府市文化振興会議アーツカウンシル部会」が、資料館の今後の方向性について、「大阪独自の文化である上方演芸を後世に伝えていくことは大阪府の文化行政が担うべき役割の一つであり、現時点では、資料館がその仕事を果たすことが望ましい」と提言
- 平成27年4月 提言を踏まえ、資料の整理・活用を継続的かつ計画的に取り組めるよう、指定管理者による運営を改め、大阪府の直営による運営を開始
- 平成30年7月 収蔵庫を大阪府咲洲庁舎に移転
- 同年11月 多くの府民や観光客等が上方演芸に触れ、楽しみながら、その魅力を知ることができる「体験型」の事業を中心に企画・運営を実施するという方針に基づき、リニューアル工事に着手
- 平成31年4月 リニューアルオープン

【機能の推移】

場所	開館～		平成 23 年 4 月～ (縮小)		平成 25 年 4 月～ (縮小・無料化)		平成 31 年 4 月～ (全面リニューアル)	
	区分	面積(m <sup>2</sup> )	区分	面積(m <sup>2</sup> )	区分	面積(m <sup>2</sup> )	区分	面積(m <sup>2</sup> )
4 階	展示室	1,170.991	存置	同 左	廃 止 ※ <sup>1</sup>			
	演芸ライブラリー	150.0 (15 ブース)						
	小演芸場 [上方亭] (有料)	98.44 (74 席)						
5 階	演芸ホール (有料)	1,484.34	廃 止 ※ <sup>2</sup>					
6 階	事務室	326.705	存置	同左	廃 止			
7 階	レッスンルーム (有料)	99.85 (60 席)	存置	同左	(改修) ※ <sup>3</sup>	同左	(改修) 常設展示エリア・ 視聴ブース (5 ブース)	99.500
	収蔵庫	260.00			存置	同左	(改修) 企画展示エリア・ 演芸ステージ・ 体験エリア・ エンディング通路  (事務室含む)	305.750
	共用部分	250.093			存置	同左	(改修)	204.693
	合 計	3,591.979		2,107.639		609.943		609.943

※<sup>1</sup> ライブラリーは、9 ブースに縮小のうえ 7 階へ移設

※<sup>2</sup> 平成 22 年 12 月に演芸ホールを廃止

※<sup>3</sup> レッスンルーム(有料)を廃止のうえ、ライブラリー(9 ブース)及び事務室に改修

【管理運営】

期 間	管 理 運 営	備 考
開 館 ～平成 14 年 3 月	(財)大阪府文化振興財団	管理運営委託
平成 14 年 4 月～平成 18 年 3 月	大 阪 府	直営
平成 18 年 4 月～平成 22 年 12 月	(NPO) ニューウエーブ日東大阪	指定管理
平成 23 年 1 月～平成 23 年 3 月	大 阪 府	直営 (休館)
平成 23 年 4 月～平成 27 年 3 月	吉本興業グループ	指定管理
平成 27 年 4 月～	大 阪 府	直営

【歴代館長】

期 間	歴 代 館 長 名
平成 8 年 11 月 ～	粕 林 利 男
平成 11 年 4 月～	井 上 宏
平成 14 年 4 月～	有 川 寛
平成 18 年 4 月～	伊 東 雄 三
平成 23 年 1 月～	★大阪府直営<休館>
平成 23 年 4 月～	河 井 泉
平成 25 年 4 月～	井 上 明
平成 26 年 4 月～	田 中 宏 幸
平成 27 年 4 月～	★大阪府直営

---

大阪府立上方演芸資料館 令和5年度年報

編集・発行 大阪府立上方演芸資料館  
〒542-0075 大阪府中央区難波千日前 12-7  
YES・NAMBAビル7階

TEL : 06-6631-0884

令和6年12月発行

---

---